

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李 相旻^{イ サンミン}

本論文は、十四世紀に活躍した二条派の歌僧、頓阿の和歌および和歌意識を分析・考察した論文である。序章・終章のほか、本論は三章七節から構成されている。

第一章「頓阿の旅」は旅の主題などをめぐって、『草庵集』所収歌やその構造を考察したものである。第一節「頓阿法師の歌枕と旅——田子の浦を中心に——」は、山部赤人の「田子の浦に」歌をふまえた頓阿の和歌を、同歌を享受した中世和歌と比較したうえで、古歌にすぎながらも旅の現実性を生かしている点に頓阿の和歌の独自性を見いだしている。なかでも、旅の体験の表現形成のうえで、他阿上人の詠歌を媒介にしているとの指摘は注目に値する。第二節「『草庵集』の旅歌」は頓阿の家集の旅部に精妙な配列法が見られるとし、富士見の旅日記の濫觴とも称すべき歌群や、院政期の歌林苑歌人たちの数寄の営みを継承するかのような難波逍遥の歌群などが、虚構と現実をない交ぜにしながらかつ形成されている様相を浮き彫りにする。第三節「『草庵集』の構成と特性」は、四季部を中心に『草庵集』の配列の妙を分析したもので、主題の変わり目の編集に特有の配慮を示していることなどを指摘する。

第二章「『頓阿百首』の注釈」は、『草庵集』に収められていない頓阿の二つの百首の注釈学的研究である。第一節『頓阿百首 A』、第二節『頓阿百首 B』の計 200 首につき、丁寧に語釈・通釈を施し、本歌・参考歌を肌理細やかに指摘して、頓阿が古歌・漢詩文・物語などの古典世界をどのように生かしているかを中心に、その作意を読み解いている。

第三章「『頓阿百首』の特性」第一節「『頓阿百首 A』」は、この百首に歌枕を詠み込んだ歌が通例以上に多く、それが伊勢国関係の歌枕をしきりと詠み込んでいることに由来すること、および西行を追慕する歌が散見することを指摘したうえで、頓阿自身の太神宮参籠の経験を生かしつつ、太神宮奉納にふさわしく詠歌していることを明らかにする。第二節「『頓阿百首 B』」は、詠作年次不明であり、頓阿晩年の作と推定されるのみだったこの百首について、『草庵集』『続草庵集』との共通表現が多く見られ、かつそれらが、『頓阿百首 B』のやや平面的な表現から、より洗練された表現として生かされていることを丁寧な読解によって解明したうえで、この百首が頓阿若年の時代の習作であるとの、蓋然性の高い推定を提示する。

本論文は、頓阿の家集および二種の百首歌の構成や和歌表現を丁寧に注解し分析することを通じて、あらわな個性の表出を抑制し、古典的な世界と自己の現実性を緻密な表現意識のもとに重ね合わせようとする、頓阿の方法意識を明らかにしている。旅や四季部以外の『草庵集』の構成の分析など今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。